

農家民宿に対する農家意識 - 青森県弘前市における調査から -
Farmers' Attitude to Farm-inn - In case of Hirosaki City in Aomori prefecture -

○ 藤崎浩幸* 谷口建*
○ FUJISAKI, Hiroyuki* TANIGUCHI, Ken*

1. はじめに

農村活性化の一方策としてグリーンツーリズムの考え方が提唱され、1995年に農林漁業体験民宿の登録制度が開始してから10年以上が経過し、2003年頃から農家民宿関係の規制緩和も進み、農林漁家民宿の開業が広がっている¹⁾。しかし、青森県弘前市周辺では、個人で農家民宿を開業する事例は少ないままで、修学旅行等の農家宿泊体験受入れを行っている団体はあるものの会員農家数の確保に苦労している状況がある。そこで本研究では、弘前市におけるグリーンツーリズム振興を検討する一環として、市内の認定農業者を対象に農家民宿について意識調査を行った。

2. 調査概要

調査内容は、回答者と家族の年齢・就業状況、主な農作物収入といった回答者属性と、グリーンツーリズムの認知度、都市農村交流の意義への意識、宿泊客受入れへの取り組み意向と、受入意向のない農家についてはその理由、受入意向のある農家については望まれる支援対策である。

農家民宿の形態としては、(本格的な)「農家民宿」: 年200人程度(週4人を50週)に一泊二食を提供し複合経営の一部門として年150万円程度(1人7500円)の粗収入が天候に左右されず随時現金で期待できる、「農家民泊」: 修学旅行などの農作業・農家宿泊体験者を1回につき4人程度、年4回程度受入れ年12万程度お小遣い相当の粗収入が期待できる、「ワーキングホリデー」: 農作業を手伝ってもらう代わりに食事と宿泊場所を提供し、金銭のやりとりをしない、「地区建物活用」地区の空き家や集会研修施設を活用し住民有志が農村民宿を運営しほぼ毎日来訪客に対応する、の4形態を取り上げた。

調査対象者の選定と配布は弘前市農政課と農林業対策室が行い、2006年8月の認定農業者の会合の際に配布回収した23件、同年10月の新たに認定農業者となった者の会合の際に配布回収した24件、そして10月の会合の欠席者に郵送で返信用封筒を同封して145件配布したうち回収された23件(回収率16%)の合計70件から回答があった。

回答者の性別は男が96%、年齢は50歳代が37%、40歳代34%、30歳代16%、60歳代10%、20歳代3%であった。販売農作物は、リンゴと水稻50%、リンゴのみ40%、リンゴと他の果樹や野菜7%とほとんどがリンゴ中心であった。

3. グリーンツーリズムの認知度と都市農村交流の意義

グリーンツーリズムについての認知度については、「よくわかる」4%、「大体わかる」39%、「言葉は知っている」37%、「初めて聞いた」17%で、「言葉は知っている」「初めて聞いた」を合わせると半数を上回り、農家へのグリーンツーリズムの認知度はかなり低い。

1)農林水産省都市農業・地域交流室「グリーン・ツーリズムの展開方向」(2007.3)
(http://www.maff.go.jp/nouson/chiki/gt/3gtsonota_tenkaihoko.pdf)

*弘前大学農学生命科学部 Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University
農家民宿 Farm-inn 意識調査 Attitude Survey 弘前市 Hirosaki City

表1は都市農村交流の意義を農家がどう考えているのか示したものである。「A. 都市住民の楽しみ」から「K. 農村の人口維持」までの11項目について「あり」から

表1. 都市農村交流の意義 (回答率: %)

Table1. Meaning of Interaction between Urban and Rural Area

項 目	あり(3)	ややあり	ややなし	なし(-3)	無回答	平均
A. 都市住民の楽しみ	38.6	52.9	7.1	1.4	-	1.57
B. 都市住民のいやし	37.1	55.7	4.3	2.9	-	1.54
C. 食農教育	55.7	35.7	8.6	-	-	1.94
D. 土地の宣伝	42.9	38.6	15.7	1.4	1.4	1.49
E. 都市住民が労力提供	12.9	25.7	47.1	12.9	1.4	-0.22
F. 農家の都市住民理解	32.9	55.7	10.0	-	1.4	1.46
G. 農家の誇り高める	30.0	41.4	22.9	4.3	1.4	0.97
H. 農家の収入	17.1	44.3	30.0	8.6	-	0.40
I. 農家の楽しみ	17.1	44.3	31.4	7.1	-	0.43
J. 農村の活気	25.7	45.7	22.9	5.7	-	0.83
K. 農村の人口維持	8.6	35.7	41.4	14.3	-	-0.23

「なし」の4段階で回答してもらい、「あり」を3、「ややあり」1、「ややなし」-1、「なし」-3として項目ごとに平均も算出した。

もっとも意義があると判断されたのは「あり」が55.7%と半数を上回った「C. 食農教育」で平均点も1.94と最も高い。「あり」の回答率が2番目に多いのは「D. 土地の宣伝」の42.9%、平均点が2番目に高いのは「A. 都市住民の楽しみ」の1.57で「B. 都市住民のいやし」「F. 農家の都市住民理解」も含めたこれら4つの項目が2位グループを形成している。逆に否定的意見の方が肯定的意見より多く平均点がマイナスとなるのは「E. 都市住民が労力提供」「K. 農村の人口維持」である。そして全体に都市住民が得られる意義よりも農家自身が得る意義を低くとられていることがわかる。

4. 宿泊客受入（農家民宿取り組み）意欲

農家の宿泊客受入（農家民宿取り組み）については、「近い将来取り組みたい(積極者)」という意欲を示したのは、「ワーキングホリデー」6件と、「農家民泊」と「地区建物活用」とともに2件ずつのべ10件(1件はワーキングホリデーと農家民泊の重複)で、9件12.9%の回答者が積極的に取り組み意欲を示した。また「将来は取り組むかもしれないが当面なし(消極者)」という回答は、ワーキングホリデー30.0%、農家民泊27.1%、地区建物活用15.7%、農家民宿4%で、いずれにも「意欲なし(無関心者)」は47%であった。

消極者と無関心者の農家民宿に取り組まない理由としては、最も多いのが「労働力に余裕がない」の「該当」45.0%「やや該当」21.7%で、次いで「手続きが面倒」「現状で問題なし」「収入につながらない」ということであった。また、積極者と消極者に農家民宿取り組み時の支援希望を問うたところ、「講習、研修、予行演習」が57.1%と最も高く、次いで「実践者の視察、情報交換」「各種手続きの代行」であった。さらに、積極者ほどグリーンツーリズムの認知度が高く、都市農村交流の意義をあると考えている傾向もうかがえ、自由記入欄からはグリーンツーリズムについて情報提供を求める意見が目についた。

5. おわりに

ほとんどの農家がリンゴ生産農家である弘前市では、1割強の農家が農家民宿に積極的な意欲を示したものの、グリーンツーリズムの認知度が低く、労力不足な農家で取り組み意欲が弱かった。今後のグリーンツーリズム振興には、その意義を農家に伝達し、地域内での労力分担方策を検討するなどが望まれる。市役所や調査農家のご協力に感謝する。